

五原則で点検しよう

敬老の日



「ほんとうの敬老とは何か」を考える人たちの間で、介護される身を体験する試みが広がっている。

先週末、静岡県浜松市で開かれた日本摂食嚥下リハビリテーション学会では、鼻から入れた管で食事をとって見た看護婦さんたちの体験が報告され、二千人を超す参加者に強い印象を与えた。

今日は敬老の日。あなたやあなたの家族が将来利用するかもしれない病院や老人ホーム、そして、この国全体の敬老度を点検してみてもいいだろうか。

社会の敬老度を測る物差しとしては、一九九一年、国連総会で決議された「高齢者のための国連原則」が参考になる。

▽経済的貢献がなくても、高齢者が評価され、虐待を受けないことなく、尊敬をもち、安心して暮らせる「尊敬の原則」

▽一人ひとりの可能性を最大限、伸ばすことができる「自己実現の原則」

▽高齢者に関係する政策の立案、実施に高齢者自身が参加する「参画の原則」

▽できるだけ長く自宅に住み、所得を得る機会をもつ「自立・独立の原則」

▽老人ホームや病院で過ごすことになっても、プライバシー、信念、自己決定、尊敬を最大限尊重される「ケアの原則」

世界には、このほとんどを満たしている国があるのに、日本の現状は程遠い。

例えば、病院や特別養護老人ホーム、有料老人ホームで、その必要はないと思われるのに、鼻から挿入された管で栄養をとらされている人々がいる。管を外そうとするからと、縛られたりもする。

学会で報告したのは、高崎市の中央群馬脳神経外科病院の看護婦さんたちである。二十四人が鼻から管を入れて過ごした。

違和感、恐怖感、苦痛……。「食べた」という満足感はなく、いらいらし、集中力や意欲がなくなった。三日間がまんできたのは、わずか八人。管をつけられたお年寄りがうつろな表情になるわけも、管を抜きたがる気持ちも、よくわかった。

この結果、以前にも増して、口から食べられるようにする技術の修得に励むようになった。「人は、口から食べられることに

よって生きていることを実感するのだ」とわかったのです」といふ。

この学会で、聖隷三方原病院の新居昭紀院長はこう訴えた。「現行の診療報酬で口から食べるためのリハビリテーションに力を入れないと、病院の経営は傾く。職員は過労で倒れそうになる。口から食べたいという願いを支援する医療は、せいたくで余分なものなのか。考えてほしい」

福祉の分野でも、「GigibaBody」と呼ぶ試みが注目されている。

福島県須賀川市の特別養護老人ホーム「シオンの園」で先ごろ、難聴や盲目、半身不随、痲痺などと同じ状態を体験して介護に生かす、泊まりがけの職員研修が行われた。おむつをつけ、鼻から管を入れ、縛られて寝かせきりにされる。

参加した厚生省の辻哲夫審議官は、管で食事をとる体験についてこう記した。

「人間のあり方から、極力避けるべきは論ずる余地もないという印象を受けた。看護、介護体制の都合でこれを行うことがあるとすれば、そのシステムは、その他の部分も同様に問題を含んでいると疑われても致し方ないだろう」

一九九一年は国際高齢者年。二〇〇〇年には公的介護保険制度が始まる。高齢者の尊敬という視点から見直すべきことは多い。